様式第3号

自己評価報告書（最終報告）

報告者	芸術系コース（美術）／武市勝

■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

Ⅰ．学長の定める重点目標

Ⅰ－1．教員養成大学教員としての授業実践

中央教育審議会は、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申したが（平成24年8月28日）、その中で「教員を高度専門職業人として明確に位置付ける」と提言している。この答申の考え方を実現するため、教員養成大学に籍を置く教員として、将来、教師を目指す学生に対してどのような授業実践を展開すればよいか。あなたの取り組みを、①授業内容、②授業方法、③成績評価の三つの観点から示してほしい。

1．目標・計画

総合的な結論から言えば、高度専門職業人としての教師とは従来の教師像における問題点を克服し、さらにグレードアップしたものと捉えられる。問題点は、すでに本学が新構想教育大学として出発した時に、いくつかの特色を打ち出したことで克服をめざしていたということができ、新しいことではない。ただ、創設後30年になろうとする昨今、更なる問題（モンスターペアレント、いじめ、教員任期など゜）も起きてきた。また、卒業・修了生から、現場における種々の問題も聞かされることが多々ある。
これらの観点からすると、本目標に関わる実践とは必ずしも教科・領域の個々の授業内容というより、教員を含めた学校現場のシステムや大学での時局性に特化したセンターなどの創設が結びつきやすい気もするが、ここでは個人としての取り組みについて考えることとしたい。
①授業内容
異論を恐れず言えば、教育大学での教科・領域の専門とは、「学校現場を軸にした専門内容をシステム化して構築すること」と考える。
ここには、「学校現場」と「専門研究」との間の＜往復＞といってもいい特性がある。
現在の教員養成構成メンバーの多くが、教員養成出身者ではなく、専門学部の出身である。したがって専門学部と比べてはるかに少ない授業時間では、自分たちの専門を「薄めた」ような授業展開をすることがしばしばあり、初等教員養成では特にそれが目立ち、教員は大学院での授業で自分たちの専門性を取り返そうとする。
しかし本来的に言えば大学院でも「教員養成の授業内容」であるべきなのである。
そして教員養成の授業内容とは、前記の「学校教育と専門研究の間の往復」になる。学校現場での授業内容でもないが、専門学部の内容でもあるべきではないのである。＜往復＞とは、両端にタッチはするが留まらないということである。振動といってもいいかもしれない。
今年度の授業内容については、学部でも院でもこのことに留意しつつ、行う予定である。特に学部においては「最低でも教員として身につけてほしい内容」、院においては「学校現場で使う意義があり、かつ使いやすく、さらに専門研究としてもおもしろい」という内容を考えている。具体的にはシラバスで紹介しているが、以後の報告で示したい。

②授業方法
方法としては制作法の紹介時に説明するが、作品の制作によって確認する。具体的には課題を多くしたいので、小作品を中心にしたい。

③成績評価
成績評価の視点は多々あるが、重視したいのは2点である。「教員の言葉を消化し、準備と後片づけができているか」、「内容に専門的なオリジナリティが感じられるか」。
作品の巧拙は評価の対象としては重視しない。

２．点検・評価

最終報告
今年度の授業については，コース教員のはからいもあって後期については，ゼミを除いて学部の「素描」と大学院の「教育実践フィールド研究」しか担当していない。したがって総括的な報告は中間のもので尽くしているが，考察や反省も含めて少し書いておく。
①授業内容
「素描」 受講学生は学部一年生，長期履修生とも，非常に熱心に取り組んだのが印象的だった。授業終了後も自分の素描についての指導を求める学生が何人もいた。１人は追い出しコンパの中で食い下がってきたものもいた。学年の特徴かもしれないし，わたしが今期限りということもあるのだろうが，驚きと同時に教師としての嬉しさも感じた。
「教育実践フィールド研究」 今回は複数担当の代表としての立場であったので，附属小の教諭と相談し，「版技法を使った新しい試みを探る」をテーマとした。最初はスタンピング等のありふれた事例が登場していたが，なかばから「段ボールにクレヨンで書き，その上に水彩絵の具を塗って水と油の反発を利用しながら版画にする」という，教材としては画期的と言える指導案が登場した。学生たちも新しい試みに気持ちが乗り，附属小での実践を含み最後まで懸命に取り組んでいた。教科書の事例として取り上げてほしい内容であった。

補足 わたしはこれまで，「学部学生の授業内容はできるだけ基礎的なものを数多く経験させる。大学院もその延長であるべきだが，本学の場合は特殊で，教育大学からの院生のみならず文学部や美術学部もいるため，経験量が異なりすぎる。このため院についてはわたし自身の研究内容を教育現場と関連させながら紹介し，制作させる」という方針をとってきた。その結果としての受講生の満足度は悪くないが，わたし自身は，少なくとも現場教員となるのならば，やはり「より多い経験，より多い知識」を身につけた方がいいと思っている。ある意味では現場教員は可能な限り広く，多くの知識を身につけるべきなのだと思う。
②授業方法 中間報告で書いた通りである。現状では院生については「実験的な制作」を重点に進めたい。
③成績評価 中間報告で書いた通りのため省略する。

Ⅱ. 分野別

Ⅱ－1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

現在は2名の大学院ゼミ2年次生を持っている。1名は自分の退職と同期に終了予定だが、もう1名は長期履修のため残存期間が残る。
修了予定の1名は中国系留学生だが、日本語能力が十分とは言えないのと糖尿病教育入院や本学で結婚したこともからんで、周辺学生との摩擦など、専門研究以外のことで足を取られることがしばしばあり、安心できる状況ではない。大きな問題になる可能性は低いと見ているが、念のため保健管理センターでのカウンセリングの時間をとってもらい、毎週通わせている。
今年度は学生委員でもあるので、他学生の情報と照合しながら見守っていく所存である。
同時に2名の専門業績の進展も図っていきたい。
授業については省略するが、昨年度までクラス担任であった学部生1名が留年したため今年度の卒業が完了するまではゼミ教員とともに指導していこうと考えている。
ただ、全体としてイベントなどの具体的な計画を持っているわけではない。上記3名については、個々ばらばらな感が強く、一緒に何かするというのは困難と考えている。
また、今年度は教育実践フィールド研究のコース教員側代表となっているので、附属との緊密な連携のもと、大学院生に対して「なにを学ぶのか」をじっくり考えさせる契機としたい。

2. 点検・評価

最終報告
ゼミ
先述の留学生については，最悪に近い結果に至ってしまった。夏の頃から様子がおかしいと感じていたが，ロータリー奨学生の集いにも出席して激励したり，吉野川市での版画展などにも案内して紹介したりしたが，制作が遅々として進まず，さらに作品の解説もまったく日本語になっていない。日常でのやりとりも，実はわかった振りをしているだけということに気がついたが，本人はやたらと言い訳をし，かつ周囲の学生との協調が非常に悪い。「このままでは修了が危うい」と叱責すると，パワハラをほのめかす態度に出，次第に指導そのものが困難になっていった。最終的には，作品については水準を落とし，解説文については奥さん（日本人）と話し合って書いたものをこちらが修整するという形でなんとかおさめた。保健管理センターや精神医学の方の相談もし，その疑念はあるものの最終的に修了できたので，苦い思いは大きいが肩の荷も下りた気がしている。
他のゼミ生については支障なく予定通りの指導をすることができた。長期履修生のため，形式としては美術コースの小川教授に指導教員を引き継ぐことになっている。
授業
1-1と重複するので省略する。

Ⅱ－2．研究

1．目標・計画

3点の目標の遂行を考えている。
①CGによる色版分解を軸にしたシルクスクリーン作品の制作。
②シルクスクリーンによるラワン板などへの転写による木版画の写真製版
③コラグラフのメディウムプリント及びその発展
この3種ともオリジナリティのある技法と自負しているが、これまで作品発表という形で行ってきたのは①である。
今年度は③について研究を進めたい。これは本学大学院の授業で紹介しているためもあるが、コラグラフを使ったものはまだ日本では例がなく、版技法の完成も含めて可能性をもっとも感じさせるためである。

2．点検・評価

最終報告
今年度は退職の片づけ・移動などのため，後半についてはほとんど研究の進展はない。出張で資料収集を行ったことと2，3の作品展示に留まってしまった。新しい版画技法のとりまとめにせよ，その制作展開にせよ，あたらしい環境の中で始めねばならない。自宅アトリエでの制作となれば設備機材でのスケールが小さくならざるを得ないが，その分自由な時間による集中できることを期待している。

Ⅱ－3．大学運営

1．目標・計画

・拡大教授会、コース会議を含めた各種会議に参加する。
・学生委員、施設整備委員として学内の運営に参画する。

2．点検・評価

最終報告
・拡大教授会、コース会議を含めた各種会議に参加する。
・学生委員、施設整備委員として学内の運営に参画する。
上記会議以外のものも含めて、出張時を除いて滞りなく実行した。

Ⅱ－4．附属学校・社会との連携，国際交流等

1．目標・計画

・教育実践フィールド研究や教育実習の指導などで附属との連携を深める
・県内の版画集団である「徳島版画」の活動を、代表として推進する
・欧州及び東南アジアの版画制作及び版画教育の実情視察を行い、研究に還元する

以上の活動は以前からも行ってきたが、今年度も継続する予定である。

2．点検・評価

最終報告
中間報告につけ加えることは特にないが，「教育実践フィールド研究」では，代表だっただけに附属との交流・交渉を何度か行い，
学生たちと教育現場との触れあい・気持ちの移入に多少の支援ができたのではと思う。

Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）

特になし。